いの流水俳壇

「当季雑詠」

友草　水月　選

盃を手に花に酔い風に酔う　大川　節弥

（評）家族や知人、友人、職場の同僚などであろうか。筵に車座になって花の下で花見の宴をしている風景である。

交わす盃、満開の花に酔い、そして微風、場の雰囲気に酔ってしまったと言うのである。

この句のうまさは、酒に酔うのは当たり前、酒を入れずに盃、花と風とで簡潔に詠んで成功している。

花見は平安時代に貴族の行楽とされた。一般庶民の行楽となったのは江戸時代の元禄以降からのことである。

○咲き満ちてこぼるる花もなかりけり　高浜　虚子

花吹雪ここにも残る戦争跡　石原　静

（評）桜の花も満開を過ぎ惜しまれながら散り始めた。美しい自然の移り変わりの中にも未だ戦争の跡が残っている。人間が人間を殺し合う忌まわしい戦争があった。山裾に横穴式の防空壕、南国市香長平野の田圃の中にはセメントで造られた掩体壕（戦闘機の格納庫）が残されており、南国市が悲惨な戦争を二度と繰り返さないために戦争遺産としている。

季語には花吹雪、散る花、飛花落花、花屑、花埃などがある。

○しきりなる落花の中に幹のあり　長谷川素逝

花仰ぐまぶしさに似て新書買ふ　刈谷　志津

（評）新しい本を買うときの気持ちは桜の花を見上げたときの眩しさに似ていると言っている。新刊の本を手にしたときの本の感触、めくる頁のインクの匂い、中身はと期待する心。そして桜の満開、真白でもなく少しピンクがかった花房が目に眩しく感じる作者の心象的な句。新しい本と桜の花との取り合わせの妙である。

こんな短歌を思い出した。

「敷島の大和心を人問はば朝日に匂う山桜花」本居　宣長

○花人に今日の一城明け渡す　鈴木　貞二

枝少し朽ちるとも花誇らし気　國田　貞子

（評）桜の木が老木となり枝も生気がないように見えるが、今年も花をいっぱいつけて誇らしげに咲いている。よく咲いてくれたと思う作者である。

桜は国花となっているが桜にはいろいろな種類があり、それぞれ特徴がある。よく公園などに植えられている桜は「そめいよしの」であり、木の寿命は60年から70年といわれ比較的短い命である。ほかには山桜、ひがん桜、せんだい桜、うすずみ桜、牡丹桜、冬に咲く冬桜などがある。

○ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな　村上　鬼城

二句抄

桜咲く海は戦を忘れたり　間　浩太

大夕焼汽車が途方にくれている　岡村　嘉夫

満開の桜散り初む嘆き雨

陽気受け桜満開人もまた

愛娘まなざしでみる芝桜　森岡　照月

山上の一畑薬師花御堂

雨に濡れ風に揺れし竹の秋　小野川町子

ささやける如き瀬音や春の川　川村　博子

花の宴残花あるなし拘らず

窓ごしに一人眺める花の雨

目を病みてより花愁はじまりぬ　津田　久美

花木瓜の真赤いのちの長かりき

新茶摘む指の白さを染めにけり　竹崎たかひろ

踏まれてもなおたちつと双葉かな

初鰹今宵は土佐の街はしり　田蔦恵美子

不沈艦大和のねむる春の海

雨ばかり花に着せたき青い空　刈谷　志津

新しき人の和作る四月かな　大川　節弥

久しぶり今夜月蝕花の雨　石原　静

初花や頬ゆるませてふところ手　國田　貞子

枝枝の芽吹きの音の響き合う　友草　水月

ほろほろと風の白木蓮散るタ

名句鑑賞　水月

春の海終日のたりのたりかな　与謝　蕪村

この句も最も世に知られている句である。風もなく穏やかな春の海。沖はもとより渚まで霞んでおり、大きな波は立たず海全体がもの憂く静かで、渚に寄せて来ては返している。のたりのたりは「のたる」を重ねた語で、「のたうちまわる」「うねっている」という意味で、春の海を表現するには最も適した言葉と言える。また「終日」の言葉も春の日永の感じがよく出ている。

海辺に住んでいない私たちが宇佐や桂浜を思い出してもこの句の情景がよく分かる。

次　題　「当季雑詠」
締め切り　毎月5日

投句先
教育委員会事務局
いの町1700－1
☎893－1922

有料広告

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 9:00～12:30	○	○	○	○ 13:00まで	○	○
午後 2:00～5:30	○	手術	○	／	○	▲

▲第2、4土曜日　午後1:30～4:00
▲第1、3、5土曜日　午後休診
休診／木曜午後　日曜祝日

やまおか眼科
院長　山岡昭宏
いの町新町20－1
TEL (088) 893－5161
■日帰り白内障手術
■OCT（光干渉断層計）